

性的指向と性自認のあり方を日本の量的調査でいかにとらえるか —大阪市民調査に向けた準備調査における項目の検討と本調査の結果—

平森大規・釜野さおり

これまで、個人の性的指向・性自認のあり方（SOGI）を、代表性を担保した量的調査でとらえる研究は欧米諸国を中心として行われてきた。そのため、これらの研究に基づく知見が法的、宗教的、文化的背景の異なる社会で適用するののかについては検討の余地がある。そこで本稿では、日本の文脈で SOGI をたずねる調査項目の検討に向けて実施したフォーカス・グループ・ディスカッションとパイロット調査の分析を行った。その結果、1) 性的指向アイデンティティ（本人の性的指向の認識）の各選択肢に説明をつけること、2) 異性愛者向けおよび非異性愛者向けに2種類の「その他」を含めること、3) 性的に惹かれる相手や性行為の相手の性別等の設問では、回答者の性別によって選択肢の男女順を並び替えられない場合、「セックスをしたことがない」等を最初の選択肢とすること、4) 異性愛者の選択肢には「すなわちゲイ・レズビアン等ではない」という文言を入れること、5) 「異性愛者」を最初の選択肢とすること、6) 「好きになる性別」という文言を性的指向をとらえる際に使用しないこと、7) 出生時に割り当てられた性別、性自認に加えて違和感の有無についてたずねる3ステップ方式を採用すること、8) 性別に関するさまざまなカテゴリーからあてはまる選択肢を複数選ぶ形の設問は使用しないこと、9) ジェンダー・セクシュアリティに関する設問において、男性カテゴリーを女性カテゴリーよりも先に位置するように表示することが、日本における無作為抽出調査で SOGI をとらえる上で重要であることがわかった。これらを踏まえ、性的指向アイデンティティについては6つの選択肢（定義付き）からなる問い、トランスジェンダーか否かについては、出生時の性別、違和感の有無、自認する性別の3問でたずねる3ステップ方式が提案された。次に、これらの項目を含む無作為抽出調査である大阪市民調査から、出生時の性別および年齢階級別に性的指向アイデンティティとトランスジェンダーか否かの分布を検討した。その結果、「決めたくない・決めていない」と答えた回答者が全体の5.2%と予想外に高いこと、性的指向アイデンティティや性自認のあり方に関する設問の項目無回答率は他の設問における項目無回答率より高くならず、むしろ回答者にとっては「仕事で得た個人収入」の方がよりセンシティブであると考えられている可能性が示された。また、トランスジェンダーのうち出生時女性の方が出生時男性に比べ男女以外の性別を自認している傾向にあること、若年層の方が両性愛者、無性愛者または「決めたくない・決めていない」を選択し、トランスジェンダーと分類される傾向にあることがわかった。SOGI 項目を含む無作為抽出調査の国内の先例は、無に等しい。欧米諸国以外において SOGI 測定法の研究を進めることの重要性が確認された。

キーワード：調査 SOGI 設問の提案、測定、無作為抽出調査、LGBT、フォーカス・グループ・ディスカッション